
MONSTER HUNTER 雷狼の咆哮

武心乱舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MONSTER HUNTER 雷狼の咆哮

【Nコード】

N4969BA

【作者名】

武心乱舞

【あらすじ】

オトモアイルーの影介^{えいすけ}とともにユクモ村を訪れた新人ハンターのグラン。グランがユクモ村を訪れた理由とは？ ユクモ村での新たな出会いがグランを成長させていく。

新天地への道（前書き）

初投稿です。

まだまだ未熟者ですが頑張ります！！

新天地への道

荷馬車がガタゴトと音を立てている。

空気のおいが変わったな、とひとりの少年ハンターは思った。

少年の名はグラン・ジーテンス。

グランは起き上がり幌をあげて馬車の外を見た。

山は美しい色に染まり、赤や黄色やオレンジといった色とりどりの葉が風に舞っていた。

「もうすぐかな・・・」

そう呟いた時だった。

「ニヤ？もう着いたのかニヤ？」

隣で丸まっていた毛糸玉が起き上がった。

「お、影介えいすけ起きたのか？」

「うニヤ、あとちょっとでこんがり魚が・・・」

「まだ寝ぼけてるな」

そういつてグランはクスリと笑った。

影介はおれのオトモアイルーだ。

オトモアイルーは何年か前にギルドが狩りに同行することを許可したアイルーのことだ。

影介との出会いは約2年前。

雇っていたハンターに捨てられてさまよい、倒れて動けなくなっているところをおれが助けたのだ。

回復した影介が自分を雇ってくれといったときには正直驚いた。

最初はオトモは雇わないつもりだったが影介があまりにも一生懸命に頼んでくるので承諾したのだった。

実際、影介には色々と助けられた。

角笛を吹くのはもちろん、素材を集めるのもだ。

そして何より影介の最大の特徴は隠密行動が他のどのオトモより
のうまいことだ。

敵に見つからずに影のように忍び寄り、確実に仕留める。

だから、おれは名前を<影介>と名付けたのだ。

「おい、影介。そろそろ着くから起きた方がいいぞ」

「むニャう。ボクが欲しいのはこんがり魚なのニャー!!」

まだ寝ぼけている影介に声をかけたときだった。

ギャーギャー、という声が聞こえ馬車別当ばしやべつとうが震えながら入ってきて叫んだ。

「モ、モンスターだ！肉食モンスターだ！！」

チツ、と舌打ちをしてグランは幌をあげて飛び降りた。

「影介、いい加減起きろ！！」

「うニャ！モ、モンスターニャ！！わかったニャー！！」

1人と1匹が小型の肉食モンスターと対峙する。

「こいつは確かジャギイだったな・・・」

ここに来る前に読んだ月刊誌「狩りに生きる」に写真が載っていた。

「よし、いくぞ！！」

そういつてグランは背負っている鉄刀みそぎ<褌>を抜き放つ。

影介は・・・いつも通りの作戦みたいだ。

目の前にいるジャギイを縦に両断して右から飛びかかってきた1頭を横に薙ぎ払い、

返す刀で左からかみつこうとした1頭を薙ぎ倒し少し距離をとつ

た。

残っているのは3頭。

グランを取り囲もうと移動し始めるがそこで角笛が鳴り響いた。

見ると影介が茂みから飛び出し角笛を吹きながら挑発している。

角笛の音に誘われジャギイ達は影介に向かっていく。

3頭が1つの方向に集まるのを見計らって走り出す。

刀を振り上げ刀身に溜まった練気を解放する。

練気を集中させ、身体を回転させて一気に踏み込む。

そして我に返り危険を感じて逃げようとするジャギイ達をまとめて吹き飛ばした。

太刀技奥義、氣刃大回転斬りだ。

まともに喰らった3頭はひとたまりもなく、即座に絶命したと分かった。

「旦那、ケガはないかニャ」

「ああ、大丈夫だ。それより日が暮れるといけなから急ごう」
ジャギイ達を倒したことを馬車別当に伝え、再び横になった。

しばらくすると馬車が動き出してゴトゴトという音が戻ってくる。少し時間はかかったものの、それ以降は何ごとのなく村にたどり着いた。

切り立った溪谷と美しい自然に囲まれた村、ユクモ村だ。

農業が盛んで名産品はユクモの木や温泉たまごだ。

良質な材木として、王都でも評判が良いらしい。

また温泉地としても有名で、心地よい温泉と美しい自然を見るために毎年多くの観光客がユクモ村を訪れるといわれていた。

村の通りは多くの人で賑わい笑い声があちこちから聞こえてきた。

「とりあえずギルドに登録しないとな・・・」

「旦那、あれを買ってくるからお金を渡して欲しいニャ」

影介が両手を出してくる。

「おっとそうだった。それじゃよろしく頼むぜ。登録が終わったら宿屋にいるからな」

「分かったのニャ」

返事をして影介が人混みに消えていった。

影介を見送ったグランは集会浴場の暖簾のれんをくぐった。

そしてギルドマスターであろう竜人族の老人に話しかけた。

「おじいさん、あんたがここのギルドマスターかい？」

「ひよひよひよ、いかにもワシはここのギルドマスターっちうとこだのう」

相手は笑って答えたがグランは少し不安になった。

話しやすい、話しやすいのだが・・・。

・・・明らかに酔っている。

それも相当だ。

「ええと、ここのギルドに登録したいんだけど・・・」

「ひよひよひよ、しいたら隣の姉ちゃんに頼んでくれるかいの？」

「お、おう。分かったぜ」

老人が指した方を見るとまだ若いであろう受付嬢がこちらをみてぎこちない笑みを作っていた。

「おれ、ここのギルドに登録したいんだけど・・・」

「は、はい。ではこちらに自分の名前、年齢、性別、得意な武器

をお書き下さい」

受付嬢から羊皮紙を受け取り、グラン・ジーテンス、16歳、男、片手剣・太刀使い、と書いた。

ギルドに登録しなければその地域での依頼、つまりクエストが受注できない。

新しい街、もしくはは地域に行った場合ギルドに登録するのはハンターの常識だった。

「これでいいかな？」

羊皮紙を受付嬢に渡すと内容を一瞥^{いちべつ}してから答えた。

「はい、結構です。これで登録完了です。これからクエストに出発なされますか？」

「いや、今日は休むよ。宿屋はどこにあるんだ？」

長旅で疲れているし早く食事もしたかった。

「宿屋は集会浴場を出て左手にあります」

「そうか、ありがとう」

受付嬢に礼を言って集会浴場を出た。

坂を下りて左に曲がると宿屋の看板が見えた。

宿屋の受付にはアイルーがちよこんと座っていた。

「あのさ、今日泊まりたいんだけど部屋って空いてるかな？」

ついさっき発行してもらったギルドカードを渡して言った。

「お客様のハンターランクはストレンジャーですかニャ。

そうするとポーンの部屋になりますが混み合っているので相部屋になりますかよろしいですかニャ？」

「ああ、構わないぜ」

相手が音爆弾みたいな奴

じゃなければな・・・。

「それではご案内しますのニャ」

アイルーについていきポーンの部屋の前まで案内された。

「それではごゆっくりですニャ」

帰って行くアイルーの背中を見送ってからおれはドアをノックした。

新天地への道（後書き）

まだ始まったばかりですが放置しないように頑張ります！！
できれば感想なんかもお願いします・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4969ba/>

MONSTER HUNTER 雷狼の咆哮

2012年1月13日20時45分発行